

カナダにおけるメディア教育と評価方法

兵庫県立神戸甲北高等学校教諭 山上 通恵

1. はじめに

5年前に兵庫教育大学大学院へ内地留学し、情報教育のカリキュラムを研究する機会を得たが、参考にしたさまざまな文献・資料で必ずカナダのメディアリテラシー教育に突き当たった。その1年後、そうした文献をもとに独自に構築したつもりの成果を、日本教育工学会で実践研究として発表した際に、ある大学の教授から、

「カナダでは10年前に終わった内容だね。」

と指摘されるにいたって、「なんとしてもカナダの教育現場をこの目で見なければ」という思いがつのった。夏休みなどを利用したとしても先方も休暇中、「生の授業は見ることはできない」とあきらめていたが、一昨年の秋、生徒が修学旅行に行って授業がなくなった間隙を縫って、念願のカナダ訪問が実現した。十分な事前の打ちあわせなしの訪問であったにもかかわらず、行く先々で丁寧な説明を受け、さまざまな知見を得た。1週間程度の訪問とは思えない豊富な収穫は、2年たった今も消化しきれず、試行錯誤の日々であるが、その成果の一部や抱えている問題点をまとめ、さまざまな方のお考えを伺いたく思い、この文を執筆している。

2. 「メディア教育」は「国語教育」

この文章は、新教科「情報」の担当者を中心に読まれるであろうが、ぜひ他の教科の先生方にも話題として提供いただき、新教科「情報」の枠組みを超えた「教育の情報化」といった視点でお読みいただければありがたい。

この原稿のタイトルは「メディア教育」であり、日本でいう「情報教育」または新教科「情報」の範疇ではないかもしれない。新教科「情報」の一部に「メディア教育」の内容が含まれるといったほうがよいだろうか。しかし、イギリスやカナダ、アメリ

カなど欧米の多くの国では、逆にメディア教育の一部に情報教育の内容が含まれていると感じた。何よりも、メディア教育を担当する教師がいずれの国でも従来の「国語の教師」や「図書館司書」であることがそれを物語っている。数学の教師である私が、メディアリテラシー教育に興味を持ってはるばるカナダまで訪れたことが、行く先々で奇異の目で見られたのもそのあたりに理由があるようである。

カナダでは小学校の国語のカリキュラムの一部にメディア学習が割り当てられることから始まり、その後、各学年で国語におけるメディア学習の占める割合は増加し、高校段階では国語のカリキュラムの約3分の1がメディア学習にさかれる。

当然、新しいメディア学習が割り込むことで国語の学習内容は大きく様変わりし、文字の読み書きや文学作品の解釈などに限定されていた内容が、テレビ・ラジオや広告といったマスメディアについて学習するようになった。劇的な変化のように思われるが、国語教育の目的が「文化を知ること」と解釈されており、その表現手段が文字に限定された時代から変化しただけと考えれば、当然の変化である。

3. カナダのメディアリテラシー教育

カナダでメディアリテラシー教育が重要視されるようになった理由には、隣国アメリカ合衆国との地理的、文化的関係を見逃できない。

カナダはアメリカと国境で接しており、また国土は広大でありながら、アメリカとの国境周辺に国民の大部分が居住している。雑誌や書籍、テレビ、ケーブルネットワークといった文化は、国境を超えて容易に流入する。私が滞在したホテルでも、部屋に備えつけられたテレビでは100チャンネル近い番組が選べ、その半分以上がアメリカ製の番組であった。当然アメリカ製の番組はアメリカ人のものの見方や価値観で構成されており、「本来カナダ人はそのよ

うに解釈しないのに」といった番組も数多くある。たとえば、黒人の取り扱いでいえば、かつての奴隷制を背景としたアメリカの解釈と、移民として受け入れているカナダの解釈は大きく異なる。アメリカ人の価値観を垂れ流しにされ、カナダの子どもたちにそうした価値観を植えつけられてしまうことに危機感を持つことは当然であろう。カナダの文化がアメリカの文化に押しつぶされないために、またカナダ人のアイデンティティを守るためにメディアリテラシー教育が発展したともいえる。



カナダとアメリカの国境

4. 子どもの接するメディア

子どもたちは、実に年間1000時間近くテレビを見ている。情報源はテレビであり、またテレビ番組を話題にした友人とのコミュニケーションである。残念ながら学校の授業は、「お勉強」であって新しい情報を獲得しているという意識は薄い。そうした子どもたちが、どっぷりつかっているテレビ社会の「正しい過ごし方」を体系的に指導する場が必要なのではないか。カナダではじまったメディアリテラシー教育は、アメリカから流入する文化に対抗することと同時に、テレビの商業主義に対抗する消費者教育の場でもあった。

テレビ番組の制作者はプロであり、視聴者は素人である。番組の間に挿入されるCMもまた、視聴者を誘導する。プロの手にかかれば、よほど意識していないかぎり、大人であっても簡単にだまされてしまう。ましてや子どもである。テレビをどう見るか、広告をどう読むか、情報の発信者（番組の制作者）が本当に伝えたいものは何か、情報の発信者が隠したいものは何か、そうした教育は幼児期から必要なのではないか。カナダのメディアリテラシー教育は、草の根の教師の危機感をきっかけにさまざまな議論を経てはじまった。

5. 情報の発信体験を通じて

子どもたちにそうした点に気づかせるために、カナダのメディアリテラシー教育は実に単純な方法をとったと私は感じている。要するに情報発信を体験し、発信者の立場で情報を考えさせている。

小学校の低学年から写真や絵を使ったストーリーの作成をしたり、テレビ番組に挿入するCMを作成したりする。日本で最近よく見るコンピュータを使ったプレゼンテーション発表など、小学校の低学年でも珍しいことではない。また撮影のアングルやBGMをかえることで映像の印象が大きくかわることを体験したり、わざと誇張表現を盛り込んだ番組を制作したりもする。こうしたことのほとんどを小学校ですませてしまっている。

中学校に進むとさらに内容は盛りだくさんになり、私が実際に見た授業では、ある電気製品に関して、「スペックの伝達を目的としたパンフレット」と「販売促進を目的としたパンフレット」とを作り分ける実習がされていた。また日本のアニメの海外進出がよく話題になるが、「科学忍者隊ガッチャマン」や「秘密戦隊ゴレンジャー」なども題材になっており、アメリカのテレビ映画の「スタートレック」などとともに、女性や子どもをどう捉えているか、有色人種をどう扱っているか、無意識の差別が埋め込まれていないかなどが議論されていた。

高校段階になると、さらに作品は大きかりになり、生放送のニュース作りなども行われる。私が訪問した高校でも、カメラやマイク、照明や反射板を持った一団が校内をウロウロしており、地元テレビ局の取材かとも思ったが、実は生徒の実習風景だった。「メディアリテラシー教育の集大成は映画制作」という考えも一部にはあるようで、キャスティングからカメラアングル、BGMなどを手分けして、自分たちが伝えたいことをいかに効果的に表現できるか、あからさまな表現はかえって視聴者の反発をかうことも考慮しながら、視聴者を取り込めるギリギリの線はどのあたりにあるかなどを学習していた。

生の情報に意図を埋め込んで発信することを体験するなかで、逆に受信者としてそうした意図を見抜く姿勢を身につけていく。このような授業を通じて、生徒は身のまわりにあふれる情報を批判的に読み解く力を確実に高めていくことがよくわかった。

6. 評価

こうした学習の成果としての作品、あるいは学習過程において生徒をどのように評価するかについてもさまざまな試行錯誤が重ねられてきた。かつて（現在も）教育が活字に支配されていた名残は根強く、評価にあたっては知識を問う形の筆記試験に代表される評価方法が中心であり、最終的に点数化されて優劣をつけていた。

しかし、メディアリテラシー教育においては、その評価の体系もまったく新しい発想が求められ、教師が生徒を評価する従来の形態だけではなく、生徒自身による自己評価、共同作業者どうしによる相互評価、教師の観察、さらには保護者からのコメントまでもが総合的な評価に反映される形が定着してきており、さまざまなワークシートや評価シートを積み重ねたポートフォリオ評価がメディアリテラシー教育の評価体系として確立されてきている。

たとえば自己評価シートでは、

- ・この実践で何を獲得したか
- ・何を試み、何に失敗したか
- ・何が無駄だったか
- ・どう改善できるか
- ・どのように発展しうるか
- ・その他

を詳細に記述するシートが定型化されている。

また、作品の制作における相互評価の観点では、

- ・アイデアは適切であったか
- ・組織的な活動ができたか
- ・メディアが効果的に活用できたか
- ・受信者を意識した作品制作ができたか
- ・作品制作を通じて技術を高めたか
- ・その他

について、お互いに詳細に記述しあう。

こうした評価は、作品の完成後に1回だけ行うのではなく、企画段階から取材、制作、発表にいたるまで、それぞれの段階で何度も行われ、本人にフィードバックされる。また教師も同様の視点でそれぞれの生徒を評価しているので、教師の評価とこの相互評価があまりに食い違う場合には、教師が何かを見落としているのか、あるいは生徒が不適切な評価をしたのか教師と生徒の間で徹底的に議論される。生徒は「評価する力」を評価されるわけで、親しい友人どうしであっても馴れあいの評価は通用し

ない。また多くの場合、メディア作品にかかわる評価には複数の教師がかかわり、その教師どうしてもその評価に関して活発に議論がされる。

このように記述された評価は、最終的に点数化されることはほとんどない。どうしても1つの評価尺度にまとめて優劣をつけたいのであるが、何らかの処理をして点数化し、たとえば同じ80点を得た2人の生徒が、その制作過程でまったく同じ活動をしたうえで、自己評価や相互評価までが完全に一致するなどあり得ない。まったく異なる活動を経た生徒を同じ80点にしてしまうことは、その過程を完全に無視することになる。すなわち評価から個々の生徒像が浮かび上がってこない。こうしたことを避けるために、詳細に記述されたワークシートや評価シートのまとまり、すなわちポートフォリオを活用することは、その積み重ねごとに個々の生徒のさまざまな個性を浮き彫りにすることが可能となり、新しい評価のあるべき姿とされている。

評価にあたっては、ある生徒が標準化された尺度のどのレベルにいるかという観点と、その生徒が授業の前後でどのような変化をしたかという観点の両面から評価をする必要があるが、メディアリテラシー教育では明らかに後者が重要視されている。

7. 日本の情報教育へ

国語科が中心となっているカナダのメディアリテラシー教育と、理科・数学・商業・工業・家庭の教師が免許を取得して実施する日本の新教科「情報」が同列に論じられるとは思わない。しかし、「文字」に関して「読み」「書き」「そろばん」が必須とされたように、「情報」に関して「受信」「発信」「編集・加工」が現代社会を生きていくうえでの必須のスキルであり、それを扱う教科という点では同列と考えてよい。

また、こうした授業を通じて身につけた考え方やスキルは、他の教科の授業のみならず、日常生活のなかでも活用されるものであることも共通している。研究者のレベルでは扱われているようだが、実践者（現場の教師）のレベルで先行事例、先進事例として学ぶ姿勢や機会が必要ではないだろうか。

Special Thanks

Carol Arcus : Unionville High School.
Chris M. Worsnop : Wright Communications
John Rollins : Lester B. Pearson High School
Paul Wozny : Ecole Secondaire Beaumont High School
Peter Stokes : National and International Liaison